

## 328. 松原内湖遺跡の発掘調査成果 (彦根藩火薬庫の調査)

### 1. 幕末の彦根藩

1853年、アメリカ東インド艦隊司令長官ペリーが軍艦四隻を率いて浦賀に来航し、日本中が大騒ぎとなりました。この事件の13年前、天保11年(1840)、西洋の軍事情報に詳しい長崎会所調役頭取高島秋帆(たかしましゅうはん)はすでに「アヘン戦争での清国の敗因は砲術の差にある」として西洋砲術に関する意見書を幕府に提出し、江戸で大砲を発射し西洋砲術を披露しています。しかし世間はこのような世界情勢を知らず、天保の改革のなか、秋帆は西洋砲術の技術の流出を逆に恐れられ、幕府により投獄されています。しかし、異国船が日本近海にさらに頻繁に出没するようになり、鎖国政策をとる幕府はその対策に躍起になりました。

弘化4年(1847)十二代藩主直亮(なおあき)のとき、彦根藩は相模国海岸警衛を命じられて、相模・安房・上総において異国船の対応にあたっています。このとき彦根藩が整えた警備体制は2,500人近い軍勢で、火器は大小砲176挺と記録されています。しかし、ここでの火器類はまだ、旧来の銃砲類であったものと考えられます。異国船の対処には軍備の近代化が必要と考えた彦根藩は嘉永2年(1849)に、高島秋帆の弟子である成瀬平三を彦根藩に招へいし、砲台の建設、西洋砲術の教授、西洋式大砲の鑄造をしています。相模の台場には、彦根晒山や藩領の佐野(栃木県)で鑄造した西洋式大砲のカノン砲やホーイッスル砲などを備えました。さらに、西洋鉄砲組を新しく編成しています。火薬の製造にあたっては蘭学の科学者木村長蔵を20石3人扶持で召し抱え、安政4年(1858)火薬製法御用掛として火薬の製造に従事させています。

軍の近代化には重火器は欠かせない存在であり、多量の火薬を必要としました。そこで彦根藩は彦根城の北2kmのところに火薬庫を備えました。そこは佐和山の急斜面と松原内湖に挟まれた狭小地で、平坦地が少なく人家からは隔絶された所です。火薬のもつ危険性からこのような場所が選ばれたのでしょう。一方、松原内湖に面しているところことから、

湖上交通を使って京都等へ火薬を輸送することができる場所でもありました。



図1 彦根藩火薬庫の位置

彦根城の北約2kmの所に火薬庫が置かれました。松原内湖を通じて湖上交通が使える場所でした。

### 2. 彦根藩の火薬庫

この場所に琵琶湖流域下水道の施設増設工事が計画されたため平成12年から14年にかけて発掘調査を実施しました。火薬庫はその役目を終えてから140年近く、竹林が繁茂し、すでにその痕跡は観察することも困難な状態でした。地表面に崩れ堆積した土砂や、後世の開墾による改変などを、慎重に除去し、彦根藩火薬庫の姿を捉えました。

火薬庫は、谷間を造成して58m×39m、面積2,260の平坦地を作り、細長い建物を設置していました。この細長い建物が火薬類を入れていた倉庫の建物です。幅4.5m、長さ30mの建物で、発掘調査では同じ規格の建物が3棟見つかりました。あと2棟分の存在も想定され、全体で5棟建っていたと考えられます。

屋根は瓦葺で「本瓦葺き」と呼ばれる丸瓦と平瓦を組み合わせた葺き方です。基礎には高さ20cmほどの基壇が設けられ、基壇の周囲は湖東流紋岩で固められています。壁が塗り落とされるところは石(チャート)



図2 調査された彦根藩火薬庫

谷の奥の造成された平坦地に、細長い建物の基礎が3棟並んでいるのが見えます（向かって左奥の池は火薬庫を模して作ったピオトープです）。造成地の中央には門と階段が付きます。手前は火薬の危険性から空閑地となっており、中央に57mにおよぶ直線的な道が見えます。道は写真の下端で90度折れ曲がり、右下に見える施設全体の出入口に向かいます。ここに見える直線的な石の列は塀の跡で、これより上が火薬庫施設内で、下は外となります。

が敷き詰められており、ここから推定される火薬庫の壁の厚みは60cmです。火薬庫らしい壁の厚い建物です。江戸時代の絵図では火薬庫は「焰硝御土蔵」と記されています。まさに、土蔵というにふさわしい建物であったと考えられます。

検出された火薬庫の建物はみな同じ規格なのですが、その仕上がり具合には違いを見ることができます。入口に近い火薬庫SB01の基壇が比較的大きな湖東流紋岩の石材で固められているのに対して、入口から遠い火薬庫SB03や、火薬庫SB02は小さな石材ばかりであったり、もともと石材が省略されていたりしています。入口から近く、人目に付くところだけ丁寧に施工した様子が伺われます。

### 3. 飾られた出入口施設

火薬庫施設の出入口として中央に門と階段が設けられています。火薬庫施設への出入りはこの門1ヶ所しかありません。ですから、倉庫に直接荷車を横付けす



図3 火薬庫SB01

石材で周囲を固めた細長い基壇の上に建てられました。周囲は60cm幅で石が敷き詰められ、厚い土壁になっていたものと考えられます。



**図4 格式ある出入口施設**

まっすぐに伸びた道の先に階段が見えます。階段の両側には3面張りの側溝が付きます。下に向かって「ハ」の字に開いて設置された溝は階段を堂々たる物に見せていたことでしょうか。しかし、この溝には流れ込む溝も、流れ出していく溝も無く、ただ入口を飾るために付けられた溝であることがわかります。

ることはできず、火薬は人力で階段を上げ下ろしていたこととなります。門は間口が2.5mで両側にくぐり戸が付いた堂々としたものです。主柱は掘立柱で据えられており、柱穴の深さは70~80cmあります。門に取り付く階段は土盛り全体の幅が8mもあり、両脇には小さな土塁と湖東流紋岩を貼り詰めた溝が付きます。火薬庫の造成法面約2mの高さを上るための階段ですが、その威風堂々とした造りは門と合わせて格式を重んじたものとなっています。特に両側に付けられた石貼りの溝は、ここに流れ込む溝も、また、流れ出していく溝にも接続されていませんでした。つまり、石貼りの溝には実用的な機能は無く、施設の正面を格式あるものとするためだけに設けられていたと考えられます。

火薬庫の基壇に用いる石材が不足しているにもかかわらず、このように正面を重厚に建てる普請を行っていたところに、彦根藩の幕末の財政事情と筆頭譜代としての保つべき格式との苦悩が伺えるのではないのでしょうか。



**図5 門と塀の遺構**

断ち割り調査中の入口施設の写真です。門の柱と塀が一線上に並んで地中深く敷設されていた様子がわかります。



図13 前期火薬庫のときに使われていた陶磁器  
碗・皿類は呉須の色の薄い肥前産のものが中心となります。



図14 後期火薬庫のときに使われていた陶磁器  
口の部分が外に反った端反り椀が多くなり、また「福禄寿」など祝いの文字が描かれたものも多く見られます。ロウソクを立てる燭台や、桶の形を模した洒落た火鉢などもあります。

## 8. おわりに

彦根藩の火薬庫は江戸幕府の崩壊とともにその機能を停止し、明治6年、火薬は新政府によって伏見へ移送されています。このとき湖上の蒸気船は航行禁止となり、また、焚き火も禁止され、大量の火薬が慎重に運ばれたことが伺えます。

明治11年には建物も払い下げられ「焰硝御土蔵」はその役目を完全に終えました。

(財団法人滋賀県文化財保護協会 横田洋三)

発掘調査の結果は平成18年(2006年)3月刊行の【琵琶湖流域下水道事業(東北部浄化センター増設工事)に伴う発掘調査報告書「松原内湖遺跡」】に詳しく報告されています。滋賀県立図書館や県下市町立図書館などでご覧いただけます。